

翌朝。木宮大介という男を再度調査しはじめた天道寺は、彼が聖パトリック女学園の学園長に就任する以前の職歴や学歴、そしてその周囲に関して徹底的に洗い出していた。角川が学園のサーバから持ち出した木宮の個人情報に頼りに、天道寺は自らの足で情報の収集に駆け回る。

聞き込みそのものはさして問題にならなかった。天道寺は聖パトリック女学園の制服を着た角川を連れ回し、「学園長のことを校内新聞で記事にする」という名目で木宮のことを先々で尋ねたが、まず疑われることはなかった。ただ問題は、もっと別のところにあったのだが……。

「友達いなかったんじゃないの？ こいつ^(^_^)」

朝から聞き取り調査を始めてそろそろ夕刻^(^_^)という時間にさしかかったところで、角川がこぼした愚痴がこれだった。

そう多い人数とは言えないが、それでも十数人の元同僚、元担任、元同級生に話を聞いた結果、ほぼ全員的一致した見解は「印象に薄くて覚えていない」だった。暗かったわけではないが目立たない人物で、一人でよく本を読んでいたというのも、ほぼ一致している。これでは確かに角川が言うように、親しい友達がいたかどうかは疑わしい。

「いただろうけど……少数で、色んな意味で濃い友達^{デイト友}だったろうなあ」

有り体に言えば、オタクだったと思われる。そんな印象だったからか、現在木宮が学園長を務めていると伝えると驚く人は多かった。

「なんかもう、これ以上は無駄じゃない？ その濃い友達^{デイト友}つてのがいるとしても、特定出来そうにないしさあ^{(;_;}」

既に飽きている角川は、暇な時間を早く終わらせたいと天道寺を急かした。

「もうちょっと待て。とりあえずこれを読むまでな」

今二人は、木宮が通っていた高校の資料室にいる。天道寺が今目を通して居るのは、木宮が卒業した際に制作された卒業アルバム。高校時代の木宮が卒業文集として何を書き記したかを調べていた。

「……この頃から既にオカルト方面へはまっていたみたいだな」

木宮は卒業文集の中で、クトゥルフ神話について熱く語っていた。およそ卒業する生徒が書き記すような事とは思えぬその内容は、誰かに読ませるといよりは、それこそクトゥルフ神話のような怪奇^{ホラーミステリー}幻想の主人公が書き残す日記のような……一方的な狂言に近かった。

「うわ、マジキモイよこいつ……いつちやてない？^(^A^)」

横からのぞき見していた角川が完全に引いている。この手の物になれている天道寺ですら眉間にしわを寄せるほどだった。

あまりにも聞いているイメージと違いすぎる。天道寺が文集を読んで真っ先に感じたのは、大上や四方^{よも}から聞いていた学園長の人柄と、文集を書いた人物とのギャップ。柔和な笑顔が印象的で温厚そうな人……という評価を受けた人物が、若かりし頃に狂気的な詩文を書いていたとは、実物を見ても頭の中ではどうにも繋がらない。しかしこれが現実で、間違いなく繋がっているはずなのだ。

「一人の作家が生み出した物語が、後に神話へと昇華していった。なら初めから神話を創造していけば、本物の神が生まれるのではないだろうか……か。なんか所々、しっかりと

した文が紛れているな……内容はまともは言い難いが」

文集の一文を読み上げながら、天道寺は内容を批評する。確かに角川が言うように気持ちの悪い狂気的内容のだが、支離滅裂な文章ではなく、むしろ理路整然としていた。言い換えるなら、「読ませる狂気」とでも言えるだろうか？

「でもなんかさあ、マジいつちゃってるっぽいよね……これでよく学園長だとか教授だとかになれたね。なんだっけ、グノーシスとかってのもこないっちゃってる教団なの？」
角川の疑問に、天道寺は否定の言葉を口にしようとして……ふと思いとどまった。答える代わりに天道寺は手にした卒業アルバムを見直し、木宮が記した狂気の言葉を目で追った。

「そうか……そうか！ 思い違いをしていたのはそこか……」

「え？ なになに、なによ、なんなの？」

突然声を張り上げる天道寺に、角川が驚き狼狽えた。そして何も言わずアルバムをしまい急ぎ部屋を出る天道寺の後を訳もわからぬままついて行く。

「判ったよ。どこかで思い違いをしているとは思っていたが……そうだよ、俺達は最初から間違えていたんだ」

角川の動揺に天道寺は足早に廊下を歩きながら答え始めるが、当然それは角川にとって何の答えにもなっていない。

「藤美、ケンは確か学園に行ってたな？」

「う、うん。今頃エミリンと会ってると思うけど……」

「よし、ケンを拾ってから戻ろっ。そうか……これはやっぱりかいなことになってきたな……」
一人天道寺だけが納得し、混乱気味の角川を引き連れて学校内の駐車場へと向かった。

いつもの時間……ほんの数日での事なのに、いつもの、と感じた事を今更ながら不思議に思う。不思議に思うが、違和感はない。

平日なら授業が終わり、各生徒が帰宅なり部活なりを始める時間帯。休日の今は熱心な運動部員が汗を流しているのがちらほらと見られるにとどまっている。そんな中、大上は学園内の教会に来ていた。

教会の扉を開け、礼拝堂に光と、大上の影が入り込む。影の先、最前列の長椅子には一人の女生徒が座っていた。

「……来てくださると思っていました、大上神父」
立ち上がり振り返る女生徒。長い髪が揺らめき、差し込む光を浴びてキラキラと輝いている。

女生徒……月原は静かに頭を下げ、大上が歩み寄るのを待っている。

会いたかった。双方共に会いたがっていた。しかし何一つ連絡はせず、ただ「いつもの時間」に「いつもの場所」へ向かっただけ。ただそれだけで、二人はすれ違うことなく約束も無しに出会えた。

「待たせてしまいましたか？」

大上の質問に、月原は首を横に振り答える。

それから……次の言葉が出てこない。

会いたかった。そして会えた二人は、それだけでひとまず幸福と安堵を得てしまった。その余韻が、静寂という間をしばし作り出している。二人はその静寂の中、ただ相手を見つめ続けていた。

「……聞いて欲しいことがあります」

静寂を打ち破り口を開いたのは、月原からだった。

「私は七年前に両親を……殺されました」

一瞬視線を落とした月原であったが、すぐに視線を戻し、まっすぐに大上を見つめ話を続ける。

「その現場に私もいたようなのですが……記憶がありませんでした。しかし私は、夢を見ることで当時の記憶を断片的に思い出したんです」

「夢？」

月原はゆっくりと首を縦に振る。

「三年前、この学園に入学してから……父の親友だったという学園長に、催眠療法というのを施していただきました」

やはりか。大上は予測通り学園長が絡んでいたことに納得し、そして怒りが沸々と沸いてきた。なにが催眠療法だ、と。

「夢の中では……両親が殺され、おおかみやしろ狼男が私に手を伸ばして来て……そして……」

突然月原はうつむき、まるで寒そうに腕を胸の前で組み小刻みに震えだした。それでも月原は、どうにか唇を動かし言葉を絞り出す。

「家が、両親が……炎に包まれていくんです……」

何故こんなにも震えるのだろうか。大上がそう疑問を持つのは当然だが、当の本人である月原も、自分が何故こんなにも震えているのか疑問だった。

トラウマになっていたのだろうか？ それとも……やはり心のどこかで認めているからなのか。それでも告げなければ。月原はありったけの勇気で胸の内を明かす。

「私が……私が燃やしたのかもしれない……」

「え？」

突然の、そして予想外の告白に、大上は一声発することしか出来ずにいた。大上にとつては月原の言う「おおかみやしろ狼男が手を伸ばして来た」という発言の方が重要だと思っていたのだが、予期せぬ方向に話が動き戸惑った。しかしここで動揺しては月原を不安にさせるだけ。大上は黙って、月原の言葉を待った。

「全然……今の今まで、考えないようにしてたのに……」

本当に、つい先ほどまでは考えもしなかったこと。何故今になって突然思い出したのか。止まらぬ震えに苦しみながら、月原はそれでも独白していった。まるで神に懺悔ざんげをするかのように。

「そう……初めて夢を見たときもこうだった……その事を学園長に話したら……そうだ、その時学園長が、私のせいじゃない、みんな私が見たおおかみやしろ狼男がやった事ですって、何度も何度も……」

震えが大きくなる。まるで封じられたかのようなその記憶が鮮明になるにつれ、月原は何故自分が震えているのかを理解し始める。

怖いのだ。認めることが。

「だから私、全てを狼男おおかみおとこのせいにして……狼男おおかみおとこを探して倒せば良いんだって……だから木宮司教の言われるままに……でも、それは間違ってるって、間違ってるから……それに気付いたから私……」

なんということだろうか。大上は今月原が怯えている原因を作り出したのが自分であることを悟り、胸が張り裂けそうになる。むろん大上がしたこと、彼の説得が間違っていたわけではない。それは重々承知しているが、しかし今こうして月原を苦しめている原因の一端に自分が関わっている事に、大上が責任を感じてしまうのは無理からぬ事かもしれない。

「だから本当は……本当は私が……パパと、ママを……私が……」

いけない！ 大上はまた混乱し始めた月原に危機感を募らせた。このままでは発火能力バイロキネシスをまた誘発してしまうかもしれない。

「あ……」

咄嗟とつさだった。どうしてこのような行動に出たのか、大上自身もよく判ってはいない。だがこれが良いのだと、行動に出るからそう思えた。

抱きしめていた。大上は月原を抱きしめていた。

「大丈夫、キミじゃない……キミじゃないよ……」

あやすように、頭を撫でながら大上は囁くように言い聞かせる。

まるで昨夜のように。

あの夜、月原から噴き出した炎が大上に抱きしめられながら鎮火していったように、月原の震えも次第に弱まり、そして収まった。

「キミのご両親には、刃物で切られた痕あとがあつたそうじゃないか……大丈夫、キミのせいじゃないよ……」

月原は自分に発火能力バイロキネシスという力がある事を知り、その力と夢で見た光景がシンクロしてしまったのだろう。大上に夢の話をしようにとしたことで。月原は突然のフラッシュバックフラッシュバックと身震いが生じた原因を、温もりの中で突き止めていた。

暖かい。まどろみそうな感触に気を緩めながら、月原は抱擁ほうようされている。

この感触、この暖かさ……どこか懐かしい。ふと月原は記憶をたぐる。

遠い昔、父に抱きしめてもらったあの暖かさ。懐かしい思い出……でも、もつと最近、この暖かさをどこかで……月原の記憶は、瞬時にごく最近へと引き戻される。

あの人だ。あの人と同じ……月原はいつの間にか、自らも腕を大上に回していた。

「懺悔ざんげを……私の懺悔を聞いてください、月原神父……」

誰へ向けての懺悔か。それを突き詰めるのは、もう月原の中では愚問となっていた。確信は全くないが、月原の中で聞いて欲しい人と謝るべき人は、もはや同一か思えなかった。

「私で良ければ……」

よくよく彼の声を聞けば、あの人と同じではないか。もし確信があるとすれば、その声と、この抱擁。それだけで月原には充分だった。

「ずっと……私は敵かたきを討つことばかりを考えていました。それが正しいと信じていました。だから友達も作らず、趣味も持たず……敵を討つための修行をする為に、神様を信じ

るぶりまでしました」

ふりか……大上はその言葉に安堵していた。もし真剣に武闘派グノーシス主義を信仰していたらと悩んでいたが、これで一つ解決できた。

そういえば以前、彼女は信仰心が無いことと、神を信じる人達の好意に甘えることの狭間に悩んでいた。それは彼女が敵討ちのために異端教団を利用していたことも含んでいたのだろう。

「敵だと思っていた狼男を探したり調べたり……槍の使い方も学びました。そして気付いたら私……みんなから冷たい人って言われてました。私、怒ることしか出来なくなっていました……」

冷静な人と見られていた月原の根本。それはあまりにも悲しい経緯。そこへ誘ったのは詐欺師木宮大介。大上は異端教団への怒りを再燃し始めていた。

「私……ちゃんとあの人に謝りたい。あの人にお礼を言いたい。でも……どんな顔をして謝ればいいのか、お礼を言えいいのか……もう判らないんです。言葉だけじゃ、冷たい私じゃダメですよ……」

今も泣きたかった。しかし涙の出し方も忘れてしまった。昨日までは気にもとめなかったことが、本当はこんなにも辛いことなんだと月原は痛感していた。

「そんなことないですよ……」

月原の頭を撫でながら、大上は声を掛ける。

「言霊というのを知っていますか？ 言葉に宿る力のことですが……それはすなわち、感情のことです」

自らの言葉にもその言霊を乗せ、大上はゆっくりと語り聞かせていく。

「心を込めた言葉には、ちゃんと感情がこもり、伝わるものです。大丈夫。あなたなら、伝えることが出来ますから」

もう伝わっているから。口にはしないがそこまでの感情を言葉に乗せる大上。

「どうしても気になるのです……こうして顔を見せないまま伝えても良いじゃないですか。私で良ければ、いつでも胸を貸しますよ」

あなたの言う「あの人」は、すぐ目の前にいるのだから。そこまで言ってしまったかった大上だったが、それはさすがに口を閉ざした。しかしもう……バレているような気がする。大上は何となく、月原から伝わる「言霊」で、それを感じていた。

「ありがとうございます……ごさいます……ごめんなさい……」

今自分はどんな顔をしているのだろうか。言葉に感謝と謝罪を乗せながら、月原は思う。少しでも、ほんの少しでも、笑えていたらいいな。

再び静寂が二人を包む。それはとてもとても、暖かくゆったりとした一時。

「困りましたね……注意したはずですよ？ 大上神父」

幸福は本当に一時しか持続しなかった。突然二人に掛けられた声。我に振り返り周囲を見回すと、奥の扉から学園長が数名従え乱入している。振り返ると、入り口の扉からも神父の姿をした者が三人ほど、扉を塞ぐように立っていた。

「生徒に手を出すとは……それも神の前で。恥を知りなさい」

言葉こそ説教、そして表情こそ柔和だが、態度は侮蔑。笑顔の仮面を剥がせば、そこには意地の悪い笑みが素顔に張り付いているのだろう。

先ほど大上が言霊の話をしたが、それはこの学園長にも同じ事が言えた。これまで大上が感じていた学園長の温厚そうな人柄は、彼の言葉からは全く感じられない。代わりに、刺々しく攻撃的な意志が伝わってくる。これが彼の本性なのだろう。

まったく、たいした役者だ。大上は口元をつり上げ苦笑していた。

「怪しいとは思っていましたよ……来て早々、シスター月原と接触を図ったところからね。どうやって理事長を騙したのかは知りませんが、まったくんだ詐欺師ですよあなたは」
「その言葉、そっくり返しますよ。木宮学園長」

月原を、生徒を、理事長を、あらゆる人を欺いた男を、大上は睨みつけた。

学園長の言葉をそのまま信じるなら、どうやら大上は初めから目を付けられていたらしい。確かに自分が目を掛けている月原にすぐさま接触すれば警戒はするだろうし、なにより突然決まった研修員の訪問だ。後ろめたいことを山ほど行ってきた男なら、あらゆる事に敏感となり、唐突な状況に神経を尖らせるのは当然のことだろう。木宮は静かに、大上の動向を監視していたようだ。だからこそ、このタイミングで待ち伏せすることも出来た。

「シスター月原。その男はあなたを惑わす悪魔です。さあ、こちらへ来なさい」

手を伸ばし月原を呼び込む学園長。しかし月原は大上の腕にしがみつき動かなかった。その態度に、学園長の眉がぴくりと動く。

「なるほど。私が思っていた以上に、巧みな話術をお持ちだったようだね、大上神父……いや、いたいいけな子羊を惑わす悪魔め」

可愛い信徒に無視されながらも、学園長の顔にはまだ余裕が見られる。

「どのような言葉でシスター月原の心を乱したのかは知りませんが……愚かなことです。神の子が、そう易々と悪魔に心を許す事は無いのです。それを思い知るがいい」

ほくそ笑む学園長。彼には何か、決定的な切り札があるのだろう。大上は黙ったまま身と心を構える。

「シスター月原、その男こそ、あなたが探していたご両親の敵、狼男なのですよ！」
バレていたのか？ この発言にはさすがに驚かされたか、大上は動揺する。が、同時に醜態をさらすな、ハードボイルドでいると、自分に叱咤する。それが功を奏したのか、少なくとも態度にはほとんど表れることはなかった。

それよりも気になるのは、月原の反応。大上は自分の腕にしがみついている月原へと視線を移す。

「……違う」

首を横に振り、月原は学園長の言葉を否定していた。

「大上神父は……敵じゃな……」
月原も学園長の言葉に一瞬動揺したが、惑わされることはなかった。誰の言葉が正しく、そして信用できるか。昨日までの月原なら、間違いなく学園長の言葉に従っていただろう。しかし大上の説得と優しさ、そして不意に感じた学園長……木宮司祭への不信任が、月原の決断に大きく関与していた。

しがみついていた大上の腕に、月原はよりぎゅっと力を込める。自分が初めて木宮司祭に逆らったことに対する僅かな恐怖が彼女の腕に力を込めさせたが、しかし月原は自分の発言に確信を持っており、後悔などするはずもなかった。

対して木宮は、誰の目から見ても判るほどに驚愕していた。絶対の自信を持っていた

一言がこうもあっさり拒絶され、二の句が継げずにいる。よほどおおかみおとこ 狼男 というキーワードが月原を揺り動かすものと自信を持っていたのだろうが、こうもアツサリと効果を示さなかったのが想定外だった様子。

「……どうやら当てが外れたようですね、学園長」

月原の言動にホッと胸をなで下ろした大上。同時に反撃の機会と勇気を与えてもらった大上は、余裕を無くし柔和な仮面の剥がれた木宮に言葉で切り返した。

「そっくりそのまま、あなたの言葉をお返ししましょうか……神の子が、そう易々と悪魔に心を許す事は無いんですよ」

ニヤリと不適に微笑み、大上は鎌を掛けに出る。

「洗脳がうまくいっていると思っていましたか？ 残念ながら、彼女はあなたの信じる邪神を信仰するほど愚かではないんですよ」

さて、相手の反応はどうだ？ 大上は木宮をじっと睨みつけた。

結果はあからさま。先ほど以上に驚愕し動揺を隠さない異端教団カルトの教祖がそこにいる。

そして驚き動揺しているのは彼一人ではない。周囲を囲んでいる邪教徒も、そして月原も目を見開き木宮と大上を交互に見つめていた。

ハッキリした確証は無かったが、月原の口から「催眠療法」の事が聞けた大上は、これまでの推理と合わせ答えを導き出した。それを担保にして大きな賭に出たわけだが……予想以上の大当たりだった様子。

だが問題は、あまりにも大当たりすぎたことか。

「おのれ……貴様何者だ！ 世迷い言を神の前でよくも……みなさん、あの悪魔を捉えシスター月原を救い出すのです！」

挑発としての効果が大きすぎた。囲まれている以上、どこかで隙を見て逃げ出す公算をしておくべきだったが、調子に乗りすぎた。

動揺していた異端教団カルトの信徒達だったが、教祖の一言でそれも収まり、彼の言葉に従い二人に詰め寄ってくる。

このままではずい。焦り逸る気持ちを落ち着かせながら周囲を見渡す大上。信徒は前と後ろに三人ずつ。前から迫る信徒はまっすぐやってくるが、後方の信徒達は礼拝堂に設置されている長椅子が邪魔でまっすぐには来られない。椅子と椅子の間、中央の通路に三人が並んで迫ってくる。

「走って！」

大上は月原の手を引き、礼拝堂の横へと走り出す。そこから長椅子の脇を通り正面の扉へと向かった。中央にいた信徒達はそれに気づき長椅子の間を通るように脇へと進もうとするが、十分なスペースがないためたついている。

しかし一人がすぐに引き返し、大上達を先回りする。

「走って、逃げて！」

大上は先回りしてきた信徒と組み合いながら叫んだ。

しかし月原は立ち止まってしまふ。このまま逃げて良いのか……それに、どこへ逃げるというのか。なにより、大上を置いて行くなど出来ようものか、と。

「かまうな！ 逃げるんだ、早く！」

後ろから追いついた他の信徒達を食い止めながら叫ぶ大上。しかしそれでも、月原は決

断しかねている。

そこへ、大上が食い止めきれなかった信徒が月原に迫ってきた。

捕まっちゃいけない。それは本能が下した決断だったのか、月原は迫る元^{もと}同胞に恐怖を感じ、扉へと急いだ。

大きな扉を開けると、月原の肩に手が掛かった。それを振り払い、外へと駆け出す。とにかく逃げなくては。月原はそのまま学園の外へ、校門へと走り出した。後ろからは二人の男が迫ってくる。

元々運動神経の良かった月原。すぐに追いつかれはしないが、しかし男女の、そして子供と大人の身体能力の違いは大きく、振り切れるほどには至らない。

それでも外へ。誰か助けを呼ばなければ。不運なことに、部活動に熱中している生徒達は月原達のことを……見えていたとしても……誰も気にとめてはくれなかった。

徐々に絶望が月原の心を覆い尽くす。息を切らし懸命に走るが、どこまで走ればいいのか……そんな月原に、希望の光が差し込んだ。

校門のすぐ近くに、赤い自動車が停車している。そして二人の人影……一人は学園の制服を着ていた。助かるかも。

「ちよっ、鷹丸ちゃん！」

女生徒が気付いてくれた。もう一人の男性に声を掛けている。男は追われている月原を見て驚いていたが、すぐさま行動を起こした。

「藤美、彼女を中に！」

懐に手を入れ、駆け寄る男。彼はそのまま月原を通り過ぎ、後方の男達に向け何か小袋のようなものを投げつけた。

キラキラと輝く、それはどうやら何かの粉が入った小袋。突然顔に小袋を投げつけられ目の前できらめく粉が舞う。男達は慌てて顔を拭うが、目に入った粉はなかなかとれない。それどころか、視界がチカチカし意識も多少朦朧^{もうちゅう}となっている。

「妖精^{フェアリーダスト}の粉だ、しばらくはそうしてな。クリス、出るぞ」

既に車の中へ乗り込んだ二人は何も手を付けていないのに、運転席の扉が独りでに開く。そこへ男が乗り込み、シートベルトを付けながらハンドルに手を掛けないまま、走り出した。

「まっ、待つてください！ まだ大上神父が、教会の中に！」

息もまだ整えられないまま、月原は素性を知らない二人に訴える。

「えっ、ケンちゃんが？ ちよっ、どうする鷹丸ちゃん……」

月原同様に狼狽^{うつた}始めた女生徒。しかし車は止まらなかった。

「……残念だけど、今の俺達にケンを助けられるだけの戦力はないよ。あいつなら大丈夫。後できっと助けるから……」

非情なようだが、それは正しい判断だろう。仮に多少戦えたとしても、相手の人数もハッキリせず、なおかつ今逃げ出してきたばかりの月原を連れて戻るわけにはいかない。先に逃げてもらったとしても、太った男と非力な女生徒で何が出来るというのか。

「でも……」

月原にもその事情は判っている。判ってはいるが、しかしそう簡単に割り切れるものではない。それでも車は、どんどん学園を離れていった。

強く強く後ろ髪を引かれながら、三人は運転手の館……妖精学者の館へと向かっていた。

「俺達は最初から、大きな思い違いをしていたんだ」

館に戻った天道寺は、まず月原を落ち着かせ、彼女から教会で起こった一連の出来事を聞き出していた。その上で、今後の対策も含め館に集まった大上を除くメンバーに自分の推理を披露し始めた。

「ケン是最初に月原さんと出会ったとき、彼女が着ていた尼僧服にグノーシス十字の印を見つけ、月原さんを「グノーシス主義の一派」で「武闘派」の「ハンター」と断定した。それに俺達も異論はなかったが、そもそもこれが間違っていたんだ」

しばし間をおき、反応を伺う天道寺。一通り場の面子を見渡してから、言葉を続けた。

「まずケンは、不当なハンターを見つける手段として噂を藤美に流させ……月原さんがその噂に飛びつき、ケンを見つけすぐに襲ってきた事から、ケンは月原さんのことをハンターだと思った。そしてグノーシス十字を見て、グノーシス主義の武闘派だと推測したわけだが……実際には、月原さんはハンターではなくご両親の敵が討ちたかっただけだった……そうですね？ 月原さん」

天道寺に尋ねられ、月原はこくりと一度頷いた。

月原は館に到着してから、大上が満月の夜に二度出会った狼男と同一人物なのだと聞かされた。何となく察していた月原は特にもう驚かなかったが、むしろ月原がどう反応するか構えていた天道寺達の方が月原に驚かされていた。そして天道寺は、月原を自分達の事情を知る仲間として迎え入れ、彼女を含め話を進めていた。

「その事は俺達も調べを進める中で知ることが出来たが……「武闘派グノーシス主義」という勘違いはしたままだった」

「えっ？ でもさ、実際にその通りなんじゃないの？ エミりんもそう言ってるしさ」
角川が月原に顔を向けながら異論を唱える。月原は呼ばれ慣れない「エミりん」という名称に多少戸惑いながら、しかし角川の言葉に頷いた。

「いや……確かに月原さんや他の信徒も自分達はグノーシス主義の教団だと思っているだろう。しかし肝心の、彼らを導いている木宮の本心は全く違っていたはずだ」

天道寺の推理に興味半分疑問半分で、月原は耳を傾ける。自分達が教えられていた教義が偽りだと言われれば……熱心な信者なら怒鳴り散らすところだろう。しかし月原は元々信仰心が薄く、しかも今は木宮への信頼を完全に失っている。自分がどのように騙されていたというのか……彼女の怒りはむしろ、木宮に向けられている。

「今日藤美を連れて木宮が通っていた高校を訪れ、卒業文集を読んできた。その文集で奴はクトウルフ神話について熱狂的なほど熱く語っていた」

ここで天道寺はクトウルフ神話を知らない月原に簡単な説明をし、それから話を戻し推理を続けた。

「文集は狂気じみた、誰もが気味悪がりそうなものだったんだが……問題は、狂気じみている割に藤美が読んでも理解できるほど判りやすい文だったところにある」

「あ、今なんかバカにされた気分？ (-#)」

角川の抗議は完全にスルーして、天道寺は続けた。

「つまり、書いている本人はキチンとした理性を持って卒業文集を書いていたということになる。まあこれは、原作者のH・P・ラヴクラフトや他のクトゥルフ作家だつてやっていることだ。特別なことじゃない」

一度言葉を切り様子を見る天道寺。回りくどい言い方になってしまっているが、皆ついでにきているようだ。角川を除いて。

「そんな文をわざわざ文集に何故書いたのか……これは単純に、書きたかったからだろう。思春期の青年が当時熱中していることを、十年後の自分が読み返して恥ずかしくなるとかそんな事も考えずに書き散らすのは、まあよくあることだよな」

そして思い当たることがある天道寺は、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「それだけ、当時の木宮青年はクトゥルフ神話に熱狂的だった……今で言うクトゥルフオタク、オカルトオタクつてところか。で、肝心なのはここからなんだが……」

ようやく本題にはいる。天道寺は腕を組み直し、切り出した。

「そこまでクトゥルフが好きだった木宮青年が、何故大学に進学してから宗教学の道へ進んだのか。ここなんだよ。もつと言えば、彼は少なくとも高校を卒業するまでは全くキリスト教に関わりなんか持つていない。信仰していたのはむしろクトゥルフ神話に登場する邪神達だからな」

突然の問いかけに、天道寺以外皆が眉間にしわを寄せる。

天道寺が言うように、彼や角川の調べで木宮が大学に入学するまではキリスト教に関わりがなかったことは判っている。そして大学は宗教学を専攻し、途中教員免許なども取りながらそのまま教授になったことも調べが付いていた。つまり、高校卒業までと大学入学からとでは、木宮の傾向がガラリと変わっている……ように見えている。ここまです天道寺が復習するかのよう一度話してから、また推理の続きへと戻った。

「人間、そう根本が変わるもんじゃない。それに大学受験は高校生の時、つまりクトゥルフやオカルトに熱狂的だった頃に受けている。奴は意図して宗教学の道を選んでいるはずなんだ。そして奴は教授になってからもクトゥルフやオカルトに興味を示していた……と言うより、元から彼の根本にはオカルト方面への熱意がずっと続いていたんだよ」

「でも……それなら宗教学というのはおかしな話ではなくて？ どちらかといえば、民俗学など、もつと幅の広いオカルト向けの学問を専攻すると思うのですが……」

アイリンの指摘に、天道寺は「そこなんだよ」と指をさしながら言葉を続ける。

「卒業文集の話に戻るが……狂気的な内容に紛れて、こんな事が書かれていた」

「一人の作家が生み出した物語が、後に神話へと昇華していった。なら初めから神話を創造していけば、本物の神が生まれるのではないだろうか……だな。こんな内容だ」

内容は……端的に言えば馬鹿げている。しかし現実として、馬鹿げた文を書いた男は後に異端教団の教祖になっている。見逃せない一文だろう。

「神話を創造する……奴の言う神話は、紙面上の絵空事では物足りなかつただろう。だから民俗学を学んで小説家になる道ではなく、宗教学の道へ進んで宗教の成り立ちを学び、自ら教団を立ち上げたかつた……全て推測の域を出ない話だが、こう考えると色んな事をつじつまが合うんだ」

その色んな事とつじつまを、一つ一つあげていく天道寺。

まず教授時代にオカルト方面に興味を示していたこと。これは彼の情熱がそもそもそこから方面だったのだから当然だろう。彼の熱狂的なオカルト信仰は、教授という隠れ蓑の中で着実に燃焼し続けていたのだ。

またオカルトの中でも「人知を越えた力」に興味を示していたのも、神話を生み出すために必要だと思っていたからだろうと推測できる。それが現実にあるのかどうかというよりは、現実にするために必要だと……実際彼は、催眠術を学び活用している。

「そして何故グノーシス主義なのか……これは自分が学んできたキリスト教と関連があり、そしてクトウルフの元ネタにも使われていることから選んだのだろう。つまり初めから、木宮にとってはクトウルフ……というか、奴の狂氣的な興味が根本だったんだよ。俺達の勘違いは、グノーシスありきで考えていたことだ」

グノーシス 知識を追い求めるはずの教団が、何故武装しているのか。これも教祖が元から知識ではなく狂気を求めていたからだろうと、天道寺は付け加える。

「でもさ……そんなに違いがあるの？ よくわかんないんだけど」

角川の疑問は、少なからず他の者達も持っているようだ。皆が説明を求めている。

「根本が違えば行動そのものが違ってくる。もし本当に知識を求めただけなら、武闘派なんか野蛮なものを結成したりはしないさ。実際俺達はそこで引っかけたわけだし。そして狂気が根本なら、行動が大胆で物騒になってくるもんだ」

「例えば……人殺しとか、ですか？」

天道寺もあえて口にしなかった言い辛い例えを、月原本人が不意につぶやくよう口にする。彼女のつぶやきに、天道寺は黙って頷いた。

月原の言う人殺しとは、当然彼女の両親のこと。木宮の性根に狂気があるからこそ、手段に殺人を平気で選ぶのだと天道寺は伝えている。もし彼が本当に知性を求めていたなら、学園を乗っ取るのに殺人などという凶行は犯さず、もっと外堀から……法律や流言などをを用いるような、卑劣だが合法的な手段を選ぶだろう。

月原は肩を抱き震えだした。自分で口にした言葉だが、自分で口にしたからこそ、木宮のしてきたこと、その狂気に気づき、恐怖と激怒で震えが止まらなかった。

「……まだいくつか気がかりな点はある」月原を気遣いながらも、しかし天道寺の唇は彼女のために動き続ける。「月原さんのご両親とどんな関係だったのか、そして木宮が学園長になった直接の要因だった、前学園長の遺言というのがどのよう……」

突然、電話の音が鳴った。非常にシンプルな電子音。それは月原の持つ携帯電話にメールの着信があったことを告げるものだった。月原は慌てて携帯を制服のポケットから取り出し、メールを確認する。

「……木宮司祭からです」
場に緊張が走る。

メールの内容はおおかた予測できるが……はたして全くその通りの文面が届けられていた。

「大上神父を助けたければ、一人で学園の教会まで来い……との事です」

沈黙が場を支配する。天道寺の推理が正しいかどうかはもはや関係がない。大上が捉えられ、それを餌に月原を呼び出している状況で、相手の思想がどのようなものだったかな

ど何の役に立つとこののか。

「私、行ってきます」

考えるまでもなく、もうそれしかない。月原は立ち上がり、急いで向かおうと身を翻ひるがえそうとする。

「待ちなさい」慌てる月原を、天道寺が慌てて止める。「あなたが身一つで向かってても、ケンを助けることは出来ませんよ。幸い時間の指定はありませんから、もう少し準備くらいはしてから向かいましょう」

天道寺は月原を落ち着かせながらメイドメイドに軽く指示を出し、なにやら準備をさせている。時間の指定がないとはいえ、ゆっくりしているられる状況ではないだろう。そう思うと居ても立ってもいられない月原だったが、天道寺の言うことはもっとも。そわそわしながらも、月原は黙って天道寺達の準備を待った。

「まずこれは、妖精フェアリーダストの粉が入った袋です。本当は色々用途があるんですが、これはこのまま相手の顔にぶつけて目つぶしに使ってください。うまくいけば相手の戦意をも喪失させられるかもしれません」

学園から逃げ出すときに使ったのと同じ物を、天道寺は三つほど手渡す。

「それと……これは刃を落とした槍ですから、多少傷を負わせてしまおうでしょうけど致命傷を与えるようなことはないはずですよ」

魔物相手になら殺傷力のある槍も振り回せるだろうが、人間が相手ではそうも行かない。もつとも今の月原なら魔物相手でも躊躇ちゅうちゅうするだろうが……いずれにせよ、なにも武器を持たないのはあまりにも無謀。月原はありがたく受け取った。

「最後にこれは、新しい尼僧服です。ケンの着ていたトレンチコートと同じアルケニーの糸で作られた服ですから、もしあなたが発火能力バイロキネシスを発動させてしまったとしても、とりあえず服が燃えてなくなる事はないはずですよ」

大上の話を聞いてから、いつか必要になるかと考えたアルケニーが事前に準備していた服だった。その尼僧服は炎をまとうシスターをイメージしてか、真っ赤に染められていた。

「それに着替えたら外に出てください。車を回しておきます」

「えっ、でも……メールには一人で来いと……」

メールの指示が気になっていたら月原は、同行すると申し出ている天道寺に異論を唱えてしまう。

「ここから学園までの道は判らないでしょう？ それに教会まで……ですから。俺達は教会の外で待機しますよ。具体的な作戦は、道中で立てましょうか」

天道寺はそう言いながら月原の肩を軽く叩き、リビングを後にする。

「心配いりませんよ。私達もケンも、このような自体には慣れていきますから。まずはあなたが気をしっかり持つことが大事です。さあ、早く着替えてしましましょう」

主のフォローをするように、メイドメイドが声を掛ける。

彼女が言うように、出ていった天道寺も捕らわれている大上も、幾つもの修羅場はくぐり抜けていた。それらに比べれば、今回の件はむしろ楽イージーな事件と言える。とはいえ、カウンターハンターの仕事を知らなかった月原にしてみればそんな事を知るはずもなく、また月原自身には当てはまらない事。彼女にしてみれば、今は一大事だ。そう簡単に落ち着けられるはずもなかった。

「ケンなら大丈夫。今は、あまり多くの人に狼の姿を見せられないので大人しくしているだけで、本来なら一人で簡単に脱出できたはずです」

そしておそらくは、他に何か考えがあつて捕らわれたままになっているのだろうと、アイリンは付け加える。ただ月原を巻き込むのは得策とは言い難いが……その事については黙っていた。

「でも……今日はもう満月ではありませんし……」

狼の姿になった大上がいかに優れているか。それは直接戦った月原にも判つてはいた。しかし満月の夜は昨日で、今日の月は若干欠けている。それを月原は危惧していた。

「え？ ……ああ、大丈夫ですよ」アイリンは脱いだ制服を受け取りながらくすりと笑いだし、そして彼女の不安を取り除こうと語りかける。「なにも満月の夜にだけ変身するわけではないのですよ、^{ウエア・ウルフ}狼男は。というより、本来の姿が狼で、人の姿の方が変身した姿なんです」

狼男の伝承は様々だが、満月の夜に変身するとか、噛まれた者も狼男になるとか、そのような言い伝えは全て誤りなのだと、アイリンは説明する。

「なんの不安も心配ありませんよ。あなたは、ただ真実を確かめに行くだけです。もしかしたら……戦う相手は学園長ではなく、あなた自身かもしれません……」

推理しきれなかった事実。それは月原にとって、とても辛いものばかりだろう。大上の救出や木宮の打倒よりも、それはとても難しくデリケートな問題。それをすっかり乗り越えられるかどうか……月原にとって本当の勝負は、そこにあるだろう。

「がんばりなさい。あなたに、ブリージッド様のご加護がありますように」

着替え終えた月原は深くアイリンに一礼すると、玄関へと駆けだしていった。デザインは色を除いてほぼ変わらないのに、これまで着ていた尼僧服とは違いどこか暖かみがある。何故か月原はそう思える。

来客の外出を見送るメイドは、ただ再び訪問してくれることを願うばかりであった。

月原と天道寺、そして角川は、天道寺が運転する車の中にいた。

いや厳密に言えば、運転しているのは車本人^{クルマ}なのだ。

「クリステイン^{クリスティーナ}っていうの。アメリカ産だけど九十九神^{つくもがみ}の一種なんだって^(^_^)」

紹介を受けた真つ赤なアメ車は、挨拶代わりなのか自らクラクションを鳴らした。

「あつ……お世話になります」

どこに向けてれば良いのか判らないが、月原はとりあえず頭を下げた。端から見ると滑稽^{こっけい}だが、月原は至つて真面目だ。

そもそも月原は、^{ウエア・ウルフ}狼男こそ親の敵^{かたき}だとその存在を信じてはいたが、むしろ信じていたのは^{ウエア・ウルフ}狼男の存在だけで、他の魔物^{まぶつ}については無関心……というより、存在するとも考えていなかった。そんな状況で九十九神^{つくもがみ}などと紹介されても、自分の中でどう消化して良いのか戸惑ってしまう。先ほど角川に文車^{ぶんぐるま}妖妃^{まよひ}だ電脳^{でんぶ}霊^{れい}だと自己紹介されたが、人間ではないと説明されてもどう解釈して良いのか……月原が思考出来る容量を既に超えてしまい、混乱を通り越し、もはや言われたままを素直に受け入れるしかできなかった。そんな月原が動揺もせず普段通りのポーカーフェイスを通してのを見て、角川は「やはり

お嬢様学園の優等生は理解力が違う」と感心していたが、それはまあ、そう思わせておくのが良さそうだ。

「さて、今後の作戦だけど」天道寺はハンドルに手を添えながら、助手席の月原に話しかける。「正直、特になんなんだよね」

苦笑いする天道寺に、月原が僅かに目を見開いて天道寺を見る。無表情な彼女なりに驚いたという精一杯の顔だ。

出かける間際、天道寺は「具体的な作戦を」と言っていたにもかかわらず、無いと言われれば面喰らうのも仕方ない。

「特にないつていうか、立てる必要があまりないというか……奴はおそらく、教会の中で他の信者を引き連れて待ちかまえていると思う。当然、縄かなんかでふんじばったケンと一緒にね」

わざわざ場所を指定して呼び出した以上、それは間違いないだろう。月原もうなずき同意した。

「さつきも言いましたが、ワイヤーなんかで縛られていたら別ですけど、普通の縄ならケンが狼に戻れば問題ないはずです。あいつはあいつなりに、考えがあつてあえて捕らわれただんだと思いますよ」

それともう一つ理由があるとすれば、そう安易に変身して人前に狼の姿をさすわけにはいかないという事情もある。ハンターをおびき寄せるためにあえて姿をさらすようなことはするが、それは狼の姿だけであり、人から狼へ変わる姿を見られるのは、後々人の姿で活動するときによっかいなことになりかねない。特撮番組の変身ヒーローが正体を明かさないと理由はよく似ている。まあ大上に言わせれば、「隠した方がハードボイルドっぽい」ということにもなるのだろうが。

「おそらく流れとしては……あなたの身柄とケンの身柄を交換するように話を持ちかけてくるでしょう。しかし当然、ケンをそのまま解放するつもりはないはずですよ。ですからこちらの方が圧倒的に不利……ですが、おそらく奴らはあなたを傷つけるつもりもないでしょう。ですから、交渉は必ず強気で行ってください。それとお渡しした妖精の粉の袋は常に投げられるようにしてください。それと……」

ここが一番肝心と、念を押して天道寺が説明する。

「ケンが猿ぐつわか何かかされて話せないような状況だった場合は、必ずあいつを話せるような状況にしてやってください。おそらくそれが出来れば、その後は問題ないでしょう」
そこで何故か苦笑いを浮かべる天道寺を、月原は怪訝に感じたが、特に聞き返すことはなかった。

真つ赤な車が減速し始める。決戦の場、慣れ親しんだ学園の教会まであと僅かと迫っていた。

扉を開けると、正面には大きな十字架が掲げられている。しかし今はその十字架に、二匹の蛇が交差し円と十字を象ったグノーシス十字が祀られている。

ここは夜になると、武闘派グノーシス主義……に見せかけた、教祖木宮の歪んだ願望によって結成された異端教団の集会場になる。月原はここで昼も夜も、信仰無き祈りを捧げ

ていた。

「お待ちしておりましたよ、シスター月原」

威厳をまとい柔和な仮面を貼り付けた、恰幅の良い男が一人。両手を広げ非力な美少女を歓迎している。

不気味だった。今までならその姿に信頼と安らぎすら感じていたはずが、その内に狂気を宿していると知ったとたん、同じ容姿なのにもかかわらず一目見ただけで背中に悪寒が走ってしまう。

「……大上神父はどこですか」

視界の範囲に大上の姿は確認ではない。今礼拝堂にいるのは月原と木宮、そして彼の周囲にいる信徒が四人。月原が知る限り、その四人は木宮がもつとも信頼している人物達。ある意味側近と呼んでも良い者達だ。おそらくこの四人は、木宮の内に秘めた狂気についても知っているのだろう。そうでなければ、この後展開が予測される、他の信徒達には聞かれて困る展開を目撃させられないはずだ。

「シスター月原、あなたは誤解しています」

月原の質問には答えず、木宮は言い訳を始めた。

「彼はあなたを墮落させる悪魔であると同時に、あなたのご両親の敵である……」

「大上神父はどこですか」

聞く耳は持たない。月原は再度、木宮に問いかけた。

「……シスター月原、何故そこまであの男にこだわるのですか？」

それでも木宮は答えず、代わりに質問を返してきた。

「あの男に何を吹き込まれたのかは判りませんが、真実は一つなのです。そして真実は常に知識を求めらるに神が示してくださいさるもの。あの男の戯れ言に欠片ほども知識は宿ってはいないのですよ？」

「クトゥルフだかなんだか、そういうものに夢中なあなたより、とても信頼できる方だと思えます」

木宮の眉が動き、柔和という仮面に若干亀裂が生じる。彼の眉を動かしたものは、月原がクトゥルフの名を口にしたことか、それとも木宮を「あなた」呼ばわりしたことか……おそらく双方だろう。加えて言うなら、月原が一夜にして急速に自分への信頼を無くしている事への動揺もあるのだろう。

木宮は近くの信徒に合図を送る。受け取った信徒は一度礼拝堂の後ろへと姿を消し、そして別の信徒と共に姿を現した。縄で腕を縛られ布で口を塞がれている大上を引っ張りながら。

「大上神父！」

月原の呼びかけに、大上は片目をつぶり答える。が、余裕あるその行為に反し彼の姿はとても痛々しい。顔が明らかに暴行を受け腫れ上がっているのが遠目からも判るほどに。

「シスター月原。彼を助けたいというならば……汚れてしまったあなたの心を清めるために、洗礼の儀式に参加してもらいますよ。むろん構いませんね？」

もし大上や天道寺の言葉を信じるなら……この洗礼は、「礼」の字が「脳」に変わっているものだろう。

これまでも遠回しな催眠による洗脳を続けてきた木宮が、月原の様子を見てその洗脳が

溶けてしまったのを察したのだろう。ここへ来て直接的な洗脳をしようと画策しているらしい。

「大上神父と話をさせてください」

木宮の交渉には応じず、月原は一方的な注文を付ける。しかし木宮は、これを交渉の一段階だと受け取り、素直に彼女の願いを聞き入れた。

「ふう………つたく、息苦しいつたら無いな」

猿ぐつわを解かれた大上が、大きく息を吐き出しながら愚痴をこぼす。見た目よりも元氣そうな大上に、月原はひとまず安堵した。

「それにしても洗礼ねえ………洗脳の間違いだろ？」

直球過ぎる言葉に激怒したのか、大上の腕を掴んでいた信徒が顔を殴った。月原の短い悲鳴と木宮のなだめる声で信徒は落ち着いたが、このやりとりの間も他の信徒に何の動揺も見られない。やはり殴った者も含め、ここにいる信徒は木宮の根底にある汚れた信仰を知ったうえで帰依きえしている、木宮にとって真の同胞と言うべき者達で間違いない。

良く見渡せば、信徒の中には大上が見知った顔もいる。学園内で、特に神学科の職員室で見かけた顔だ。職員にも信徒がいたことに不思議はないが、衝撃的な事実ではある。

思えば、大上の動向を監視していたのもその神学科の先生だったのだろう。月原が大上を訪ねて職員室に来たところを目撃している事を考えれば、あの時から既に目を付けられていた事になる。そう考えると、大上の潜入調査は失敗こそしていないものの成功していたとは言いがたい。

「口を慎んだ方がよろしいですよ、大上神父。正しいことではありませんが、冒瀆暴言に敵しい者もいますからね。私としては何事も暴力で片付けるのは好みませんが」

よく言う。武闘派を結成している張本人の言葉ではないだろうと大上は苦笑した。月原にしても、これまでに深く疑わなかった木宮の言葉にあからさまな嫌悪を感じてしまう。

「冒瀆？ 暴言？ 凶星の間違いだろ？ いきなり殴るってことは、大当たりだったってことだよなあ？」

それでも慎むどころか加速する大上の口。またしても脇にいる信徒が拳を振り上げたが、今度は振り下ろされる前に木宮が手振りで止めさせた。

「人は見かけによらぬとは言いますが………あなたがこれほど下品な方だとは思いませんでしたよ」

「お互い様だろ？ 俺もあんたがオカルトマニアだとは思わなかったねえ」

腫れた口元をつり上げながら、軽口を叩く余裕を見せる大上。対して木宮は張り付いた笑顔を崩さないようにするのに精一杯。立場は明らかに大上が不利なのだが、状況は大上優位に傾きつつある。

「さあシスター月原。この男をどうしても助けたいならこちらへ………」

「来るんじゃないぞ！ 月原さん」

状況の優位を取り戻そうと強引に話を進めようとする木宮を、大上が止める。月原は一瞬歩を進めようとしたが、大上の言葉でその足を止めた。

「学園長………いや、殺人犯。月原さんの両親を殺やったのはお前だな？」

突然の追求に、木宮は動揺するどころかむしる落ち着きを取り戻したかのように堂々と反論を始める。

「何を言い出すかと思えば……どこにそのような証拠が？ 根拠も無しにいい加減なことを口にするものではありませんよ。それとも、私がおのうなくだらない誘導に引っかかるでも思いましたか？」

スラスラと話し出す木宮を見て、大上は確信した。間違いないと。彼が落ち着きを取り戻したのは、言われるだろうと予測し事前に台詞を用意していたからこそだと大上は睨んだ。ならば準備した台本がどこまで優れているのか見届けてやろう……大上は唇を舐め、言葉責めという猛攻の準備を整える。

「月原さんのお父さん、つまりここ聖パトリック女学園の前学園長が、死後あなたに次期学園長の座をゆだねるよう遺言書を残していたらしいが……本当にそんな物が実在したのか？」

「当然です。キッチンと弁護士に預けられていた遺言書が残っていました。私はそれに従い、彼の意志をくみ学園長を務めることになったのです」

「彼は当時まだ若かった。そんな彼が、何故遺言書なんて残そうとしたんだ？ ちよつと不自然すぎやしないか？」

「当時彼は、自分が魔物に狙われているのを察していました。その為、万が一の事態に備えていたのでしょう」

「ほほう……だつたら当然、遺言には学園以外のことも書かれていたんだよな？ 大事な事が書かれていたんだ？ まさか自分の一人娘のことを一筆も認めてないってこともねーだろ？」

「彼のプライバシーに関わる問題です。私は学園のこと以外聞かされておりません」

「なるほどね……月原さん、キミはご両親の遺言について何か聞いているかい……そう、聞いてないんだね。おかしいな、いくら何でも娘の彼女が遺言の話は一切知らないというのは不自然だろ」

「そこまで疑うのなら、担当の弁護士や学園の理事長に確認をとつたらいかがか？」

「理事長にはある人を經由して確認をとつてもらったよ。遺言書があつたこと自体は確かだつてね。だがその一方で、月原さんに関する遺言がなかったことも確認している。これは月原さんの保護者である修道院長、シスター春川の証言だから間違いない。なあ、おかしいとは思わないか？ 学園のことは書き残して、娘のことはほつたらかして……どこ考えても、その遺言書自体が怪しいよな？」

「でしたら、執筆鑑定でもなんでも気が済むまでしたらよろしいかと。いいかげん根拠のない妄言を続けるのはおよしなさい。見苦しいですよ？」

「見苦しいのはどつちだろうね。あなたがそこまで自信があるのは……無理矢理書かせたからだろ？」

「馬鹿な。まだ根拠のない戯れ言を続ける気ですか？」

「あなたは月原さんが直接ご両親が殺される現場を見たから「催眠療法」で思い出したつて言つたらしいな。なあ、彼女が現場で目撃していたなら、何故火事に巻き込まれず、現場近くで発見されたんだ？」

「……私が現場から連れて逃げたんですよ。その後犯人である狼男を追うために、仕方なくシスター月原を置いて奴を……」

「おいおい、ずいぶんな仕打ちだな。いくら何でもその場に幼子を置いていくのかアンタ

は。それに現場にいたって？ だったら月原さんに催眠療法なんかするまでもなく、私は見たって何故言わなかった」

「それは……」

言葉に詰まりだした。ずいぶんと台本を用意していたようだが、ほころびが見え始めている。どんな役者でも、台本通りに読むだけなら緊張などしない。しかし実際には観客の目にさらされ緊張するからこそNGも出るというもの。用意した台詞を吐き続けながらも、木宮は追い詰められ焦り始めていた。

さて、仕上げだ。ここぞとばかりに、大上は口元をつり上げまくし立てる。

「殺したのはアンタだ、木宮大介。月原さんを入質に両親を脅し、遺言書を書かせたんだろ。その後殺害して……」

「何をしているのです！ すぐにシスター月原を捉えるのです！」

強硬手段というアドリブに出た木宮。突然の号令に戸惑った信徒達だったが、すぐに動き出した。槍を構える月原に、三人の信徒が襲いかかる。

ここまでか。もう少し引き出せるかと期待していた大上だったが、これで充分だろう。確かに木宮が言うように、これといった確証があったものは少ない。が、少ない証拠と推理と、そして舌先で相手を追い詰められたなら、もうこの暴挙が証拠になる。カウンターハンターとしてはこれで本気を出せる大義名分は整った。

大上は自分の腕を掴み逃げないように見張っていた二人の信徒を振り払い、縛られたまま距離を取る。

「ぐおおおおおおおおお！」

まさに獣の咆哮。突然張り上げられた声に驚き、場の全員が大上を凝視し、驚愕する。

顔が口元からまつすぐに伸び始め、全身が次第に毛で覆われていく。耳が尖り、牙が伸び、気付けば縛っていた縄はちぎれ落ちていく。自由になった腕は大きく開かれ、指先からは天に向け鋭い爪が伸びている。

気付けば、神父服を着た ウエア・ウルフ 狼男 がそこにいた。

「ばつ、馬鹿な……」

啞然とした。ここはハリウッドの撮影現場でもゲームソフトの開発室でもない。人が狼の姿へと変貌していくのを間近で見ながら、邪神の崇拜者達は驚異と恐怖に固まった。

「おいおい、俺のことを おおかみおとし 狼男 だとか言わなかったか？ 良かったな、大正解だぜ」

ニヤリと口元をつり上げる ウエア・ウルフ 狼男。対して他の男どもは顔を引きつらせていた。唯一表情を変えないのは月原のみ。

木宮が大上のことを おおかみおとし 狼男 だと言い出したときは、大上も月原も内心焦っていたが、何のことはない。ただ大上に対する月原の信頼を崩したかった、口先だけの出任せ。それがまさか本当だなどと思いきなかつた木宮は狼狽するしかなかった。

「うっ…… ああ、うああああ！」

信徒が二人、月原を無視し外へと逃げようとした。しかしそれを月原が妨害する。このまま外へ逃がすのは得策ではないと判断した彼女は、信徒二人にそれぞれ預かっていた妖精の粉入り袋を投げつける。パチパチと細かな閃光ばかりが目飛び込み、意識朦朧となる信徒達。月原は槍の柄で脇腹を強く突き、その意識を完全に奪った。

残った信徒は恐怖に顔を強張らせながらも、果敢に、しかし無謀に、ウエア・ウルフ 狼男 へ向かつ

ていった。

これが常人の反応だろう。向かってくる信徒達を見て大上は再認識する。そう考えると、たった一人で ウエア・ウルフ 狼男 に立ち向かった月原は、敵を討つためとはいえ勇敢だったのだなと感心する。

「来な。十秒で片付けてやる」

人差し指をチヨイチヨイと動かし挑発する大上。手に剣や槍を持った男達が、一斉に襲いかかる。

コンビネーションなどまったくなく、ただ闇雲に襲いかかる男達は、武器を手にしているとはいえ有象無象。大上の敵ではない。

軽いフットワークで振り下ろされる剣を交わし、突き出される槍を左手で掴み、男の脇腹に強烈なフック。別の男にはミドルキック。残った男には顎を砕く空中廻し蹴り。

「ちっ、二秒多かつたか」

床に崩れうめく男達を見下ろしながら、大上が愚痴る。漫画のように一撃で気絶はさせられないものの、戦意は充分に削げただろう。動けなくなっただけで充分だ。

「ハードボイルドなクライマックスとしちゃあ、ちょっと物足りないけどな……ま、現実つてのはこんなもんだろ」

ゆつくりと、非現実的なバケモノが木宮へ歩み寄る。

「ひっ、ひい……」

悲鳴になりきらない声を上げ、木宮は後ずさりする。さしものオカルトマニアも、実在した ウエア・ウルフ 狼男 を目の当たりにし腰が引けている。それはこの魔物の存在に戦っていると言うよりは、身の危険、命の危険を感じていることだろう。

「ひいい！」

そして振り返り、教会の奥へと逃げだそうとする木宮。

「おっと、さすがにアンタを逃がすつもりはないぜ」

瞬く間に回り込んだ大上が、木宮を指さしながら不敵に笑う。

瞬時にまた振り返り、今度は入り口へ逃げようとする木宮。しかし今度は近づいていた月原がふさがる。

「違う、違うんだ……私は、私は……」

狂気を夢見た男が、その狂気に怯えていた。もっとも大上にとって自分がその狂気の対象となるのは本意だろうが。

「私が悪いんじゃない……君は、女神になるべき人なんだ……」

「女神？」

突然木宮が口走った単語に、大上も月原も思わずその単語を口にした。

「そう、そうだ。君は女神になれるんだ……」

必死に語り出す木宮に、もはや威厳さも温厚さも、一切感じることはなかった。むしろうちに秘めていた狂気が、徐々に漏れ出してきた……そんな風にも見受けられる。あるいは、さらさられた危険に対する恐怖をごまかすために口を動かしているようにも。

「きつ、君は知っているのかね？ 君に特別な力が宿っていることを」

表情を滅多に変えない月原が、目を見開いて驚いた。それは大上も同じ事。何故木宮が知っている？ それとも、これも大上を オホカミオトシ 狼男 だと言い出した当てずっぽうな発言と同

じなのか？

「君のご両親も知らなかった力だ……そう、あれはそう、あは、はははははは！　そうだ、あれこそ、アイオン神の、いや邪神か、それとも炎の邪神か……そうだ、炎の邪神のお導きなのだ……はは、あははははははは！」

クトウルフの邪神名を口にし、偽りのグノーシス信仰よりも本質だったクトウルフ神話への信奉が際だち始めていく。

恐怖をごまかすために狂気へと走る……その様子はまるで、ラプクラフトが書き残した怪奇幻想小説そのもの。

「そうだ、彼は愚かだった。この私が、学園をより有効に活用してやると提案してやったのに断った。愚かだ。だから私は、君を誘拐し脅して言ってやったんだ、遺書を書けと。そうしたら、やっと素直になったよ……だから私は、私は……違う、私が悪いんじゃない……娘を返せなどと聞き分けのないことを言うから……そうだ、あいつが悪いんだ……」

ハッキリと明言しないが、もう何を言い出しているか見当は付いた。

こいつだ。やはり犯人はこいつだった。

唯一表情に出せる感情……月原は怒りの形相で木宮を睨みつけている。

「そうしたら、おおそうだ、その時に炎の邪神が君に力を与えられた……泣き叫びながら、あるゆる物を燃やしていったよ君は……ああ、素晴らしい、素晴らしい光景だった……」

月原の発火能力は、既に身につけていたというのか。そして火事の原因が月原の不安通り彼女によるものだった……しかしこれで、彼女の能力が両親を殺めた原因ではない事がハッキリした。それは彼女にも大上にも良い知らせではある。良い知らせではあるが、それを公言した男への怒りが緩和するものではなかった。むしろ炎のように熱く滾っていくのを二人とも感じていた。

「だからこそ、君は女神になる、なれる……なるべきなのだ。そして私達を導いておくれ……神を、私は神を生み出すんだ……」

よろよろと月原へ歩み寄る木宮。もはや彼には、彼を狂気へと誘ってしまった狼男の事など眼中にない。

「許さない……」

つぶやく月原。木宮の狂言など彼女にはどうでも良かった。重要なのは、本当の敵が誰なのかという事実。そして今、ようやくと念願の敵討ちが果たされるという現実。

「よせ！」

大上が制止する。しかし激怒している月原にその声は届かない。

ごう、という音と共に、真っ赤な尼僧服がより赤々と……月原の全身を炎が包みだした。押さえることの出来なかった、出来るはずもなかった怒りが、彼女の発火能力を発動させてしまった。

「おお、おおおお……素晴らしい、なんと素晴らしいことか……」

火柱と化した聖女を、神々しく見つめる木宮。

敵を討つ。月原は手にした槍を構え、木宮の胸めがけ突き出した。

「がっ……」

槍先は木宮の左胸を見事に突いた。しかし元々刃を落としていた槍であり、そして燃える手で槍を握っていたためか、槍は木宮を貫くことなくアツサリと折れてしまい、ただ木

宮に無様なうめき声を上げさせるに止まった。

それでいい……大上は胸をなで下ろした。いくら敵討ちとはいえ、人を故意に殺してはいけない。罰する必要があるが、なにも木宮と同じ殺人犯にまで身を落とす必要など無いのだから。

そして月原は、ありつたけの想いを込めた一突きが見事に当たり、しかし見事なまでに効果を出さなかった事へ、複雑な想いが去来した。一突きで気が晴れたと言いが、人を殺める事への躊躇いが戻り、仮に槍がもう一本あったとしても再び突き刺そうという気にはなれなかった。

しかし神は……何処のどの神かは定かではないが……木宮を許さない。

「女神よ……おお、私の女神よ……」

胸への衝撃で正気に戻ることもなく、木宮の狂気と暴走は止まらない。

よろよろと月原に近づき、木宮は炎の中へとを伸ばし、月原の腕をガツシリと掴んだ。突然の暴拳に月原は一瞬戸惑ったが、すぐに木宮を振り払おうと試みる。慌てる心が、炎を沈めるどころかより強く燃焼させてしまう。月原の力が弱いのか、たがの外れた木宮の力が強いのか、なかなか振り払えない。大上が後ろから木宮を引きはがしたときには、もう木宮の腕は真つ赤に燃えていた。

「これだ、これが女神の……ああ、熱い、熱い……はは、あは、ははははははは！」

燃える両腕を高々と掲げ、木宮は笑う。張り叫ぶように笑う。

まるで……いや、そうとしか思えない。炎が意志を持っているかのように、腕から肩、そして全身へと、一気に燃え広がっていく。

急ぎ大上が消化器を手にして戻ってきたときには、木宮は……木宮だけが、真つ黒に燃え尽きていた。